

横山ゆずり作 「スラップ」

- 効果音 (クラスのガヤ)
- 木村 お、見ろよ。中間テストの時の成績優秀者、はり出してあるぜ。
- 生徒A え、お前 出てるのか！ スゲえじゃん！
- 木村 バーカ！ おれが出てるわけないだろ。学年で上位30名だぜ。
- 生徒B そうだよ、木村の名前があるわけがないよ。ビリから30番じゃないんだからね。それよりほら、うちのクラスの高沢、すごいじゃないか、7番だってよ。
- 木村 あいつ、ガリ勉っていうんじゃないのに、なんかできるんだよなあ。
- 生徒B お前たちとは、頭の出来が違うんだよ、きっと。
- 先生 この間の中間テストの結果がはり出してあるので、もう見た者も多いと思うが、このクラスはなかなか優秀だな。やはり試験というのは日ごろの学習の積み重ねが大事なんだ。いくら一夜漬けで頑張ってもだ、(ふと気づいて)どうした、高沢、気分でも悪いのか？ ボケッとよそ見なんかして。
- 高沢明宏 いいえ。…別に。
- 先生 それなら、人が話している時はちゃんと聞きなさい。分かったな？ (さっきの話を続き)だから、普段から授業の予習復習をしっかりとだな…。(なおも話し続ける)
- 明宏(モノローグ) 長々と意味もない話をしやがって。どうせこんな二流高校であくせく勉強したって、どうしようもないさ。試験勉強もろくにしなかったおれが学年で7番だっていうんだから、この高校のたかが知れるってもんさ。
- ナレーション つぶやき声の主は、高沢明宏。都立桜高校の1年生です。中間テストでよい成績を取ったのに、彼はちっともうれしくないようです。さて、次の日の授業中も――。
- 先生/生徒 (リーディング。教師のあとに生徒が復唱する。)
- American teenagers like parties very much. They like merry parties. They do not spend much money on them.
- 女先生 高沢君、高沢君！ なんですか、さっきから窓の外ばかり眺めて。授業が上の空じゃないですか。
- 明宏 ちゃんと聞いてます。
- 女先生 まあ！ それなら今のところを読んで訳してごらんなさい。聞いていたんならできるはずですよ。
- 木村 まったく、陰険なんだよな、言うことが。おい高沢、おれのノートでよかったら…。
- 明宏 (無言でガタッとイスから立ち上がり、スラスラ読み始める。)
- 先生 も、もうそこまでよろしい。(少し慌てて)とにかく、授業を続けます。
- 効果音 (終業後のガヤ)
- 木村 高沢、お前すげえなあ。さっきの英語の時間、スラスラ答えちゃうんだもんな。あの時の先生の顔ったらなかったぜ。おれ、胸がスーツとしたよ。
- 明宏 別に。おれなんて、大したことはないさ。
- 木村 お前、中間もいい線いってたし、このままいけば、大学受験だって推薦でバッチリだぜ。
- 明宏 大学って言ったって、どうせこんな高校からじゃ大したところには行けないよ。

木村 (さえぎるように)なんだ高沢、「こんな高校」とは聞き捨てならないぜ。

生徒B やめろよ、木村。

木村 なんだよ、邪魔すんなよ。

生徒B (小声で)高沢にとっては、うちの高校なんて二流なんだよ。これは聞いた話なんだけどさ、高沢、中学の時、すごく頑張って勉強してたんだって。ほら、あの海星学院高校目指してたらしいよ。

池野まゆみ 海星学院を？ 高沢君が？

生徒B ああ、まゆみ。そうなんだよ。知らなかった？

木村 それで、落ちたのか？

生徒B 落ちたからうちの高校に来たんだろ。滑り止めに仕方なくね。でも本人は相当ショックだったらしいよ。

木村 おれだって、この高校に入るとは思ってなかったぜ。

生徒B 木村の場合は、まさか受かるとは思ってなかったんで、びっくりしたんろ？ 高沢とは大違いだよ。

木村 それを言うなって。

ナレーション クラスメートのうわさどおり、高沢明宏は受験に失敗したのです。医者之家に生まれ、医学部に通う兄を持つ彼は、自分も医学部を受験するために、大学受験にかけては名門の海星学院を目指していました。しかし、希望する高校に合格することができなかったことで、今まで打ち込んできた勉強に対する自信を失い、自らの無力さを思い知らされていました。滑り止めに受けた高校に入学しても、なんの目的も見いだせず、半ばあきらめにも似たむなしさを感じていました。

まゆみ(モノローグ)高沢君って、そんなことがあったの…。ちっとも知らなかった。そう言われてみれば、いつもなんだか暗い表情で、笑ってるの見たことないわ。このままでいいはずないわよね。五月病どころか、高沢君、卒業するまであんな顔つきで過ごしかねないわ。わたしがこんなこと言ったらおせっかいかしら。でもいいわよね、クラスメートだもん。

まゆみ 高沢君。

明宏 えっと、君は…。

まゆみ あら、入学して2か月もたってるのに、まだクラスメートの名前も覚えてくれないの？ 池野、池野まゆみよ。

明宏 そうだ、池野さんだっけ。それで僕に何か？

まゆみ うん。高沢君帰るんでしょ？ わたしも。だから途中まで一緒に行かないかと思って。

明宏 そりゃ構わないけど。

ナレーション クラスメートとあまり付き合いのない明宏にとっては、池野まゆみのおしゃべりは、久しぶりに楽しい気持ちにさせてくれました。

まゆみ よかった。高沢君って、いつも教室では難しい顔してるから、もっとコワイ人かと思ってたわ。

明宏 おれだって、以前はみんなと同じようにしゃべったり冗談言ったりしてたさ。けどもう今更…。君だって知ってるんだろ、おれが海星落ちたこと。おれなんて、必死に勉強したってさ、希望する高校に入る頭もないのさ。

ナレーション いつの間にか、明宏は、ただのクラスメートにすぎない、それも今日初めて口を利いたまゆ

みに、今まで自分の歩いてきた道を話していました。優秀な兄といつも比べられてつらかったこと。海星に入れなければなら医学部は到底無理だし、かといってほかに何がやりたいわけでもなく、今はただ自己嫌悪の毎日を過ごしていること――。

明宏 同情なんかしてくれなくていいんだぜ。哀れまれるのは一番惨めだからな。

まゆみ だれが同情なんかするもんですか。反対に、あきれて笑いが出ちゃうわ。高沢君たら、そんなことぐらいでいつも深刻そうに悩める青年を気取ってたわけ？ それじゃ逃げてるだけで、なんの解決にもならないじゃない。

明宏 「そんなことぐらい」だって？ 君なんかには一体何が分かるって言うんだ。

まゆみ 分かってないのはあなたのほうだわ。あ、高沢君、待ってよ。高沢君！（明宏、駆け出し、まゆみの声遠ざかる。）

明宏(モノローグ) (エコー) チキショー、あんなやつに、おれの気持ちなんか分かってたまるもんか！ なんで池野にこんな話しちまったんだ？！ しょせん他人の話なんか真剣に聞いてくれるやつなんかいるわけがないのに。頼れるのは、信じられるのは自分だけなんだ。…だけど、それだけの実力もないおれみたいな人間に、一体どうしろって言うんだ！

まゆみ(モノローグ) ちょっと言いすぎちゃったみたいだわ。高沢君の甘ったれ加減にカーツとなつちやっただのよね。とにかく謝らなくちゃ。でも、どうやって？ あ、そうだ、そうだわ。
(明宏、学校をサボって家にいる。)

明宏(モノローグ) (郵便受けを開けながら) きょうで3日目か。おれが3日ぐらい学校休んだって、どうせクラスのやつらは何とも思わないだろうな。それにしても…。あ、おれに手紙なんて珍しいな。だれだろ。池野まゆみ?! 冗談じゃない。今ごろ謝ってきたって、赦^{ゆる}してなんかやるもんか。(と言いながら封を切る。) なになに、「高沢君、この前はつい感情的になって、あなたを傷つけるようなことを言って、ごめんなさい。」何が「ごめんなさい」だ。えっと…「でも高沢君があんなにいろいろなことをわたしに話してくれたので、うれしく思っています。」へえー、おめでたいやつだ。「高沢君が言うように、(まゆみの声に) 確かにわたしには、あなたの味わった苦しみや悩みは理解できないかもしれませんが。でも、だからと言って、高沢君をこのまま黙って見ているわけにはいかないんです。受験の苦しみなんか、だれでも経験するもの…、なんて言うと、また怒られるかもしれないけれど。自分の目的に向かって努力することは、もちろん大事だけど、その希望がかなわなかった時には、与えられた道を素直に受け入れて、歩み出してみるべきじゃないかしら。最初はずらいかもしれないけど。高沢君はいつも、“自分の力でこれをやろう。できるはずだ”と思っているのではないですか？ でも、人間の力なんて、一番弱くて頼りないものだと思います。この言葉を知っているでしょうか？
あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。(詩篇 37:5)
いきなり“主”なんて出てきて驚かれるかもしれませんが、聖書の言葉です。」

明宏(モノローグ) 聖書だって？ あいつ、クリスチャンだったのか。「主に信頼すれば、成し遂げてくださる」だって？ 自分の力じゃダメだって言うのか？ だが、確かにおれは成し遂げられなかった。「主にゆだねよ」だって？ “主”ってなんなんだ？ “ゆだねる”って…？ (間) 池野は本気でこんなこと信じているのだろうか？ もしそうなら、おれもあるいは…。

ナレーション そう言って明宏は、もう一度まゆみの手紙を読み返してみました。

まゆみの声で (エコー) あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。(詩篇 37:5)
<完>